

て長い話と云へば即ち面白からうと断定し、悦んで傾聴するのである。また己の智能に適合する内容のものは、何度繰返して物語るとも、決して飽くことがない。尤も之は童話に限らず、學科に於ても同様である。此の點に於て兒童は大に美術家的で、彼等の心靈は間斷なく創作改作に努めて居る爲め、完全深刻なる印象は、幾回反復するも、常に心靈の歓迎を受けるのである。兒童の五官の作用もまた極めて純正で、眞善美の感覺を衝動するものゝ外は容易に受け付けないのである。更に歎美に値する兒童の特性は、印象の永續を悦ぶ一事である。之は兒童が事に飽き易い性質と矛盾するやうであるが、兎に角同一印象の永續を欲するのは疑がない。例へば兒童が童話を聞いて、『今のは可怖いお話であつたから、次には可怖くないのを話して下さい』とは決して云はぬ。前のが可怖い物語であれば、次にもまた可怖いのをと望み、可笑的であれば、何時までも可笑的物語

を繰返して希望する。こゝに於てか知る、同一印象の永續を欲するのは即ち兒童の本性で、遊戯などの際變化を欲するのは、寧ろ其の變態であることを。更に知る、變化を望むは、己れに不適當なることに對する防禦策で、自然に起り來る心理的作用に外ならぬことを。以上述べたる童話の觀察より、予は『今日の教科書は、兒童の感興を惹くこと少く、彼等を裨益すること少い』との結論に達した。今日の教科書は、叙事詩的風韻と統一とを缺いて居るは勿論、倫理、歴史、地理、博物等、種々雑多の斷片が、錯然として我樂多文庫の觀を呈し、而も材料が互に衝突し、互に排斥して居る。また客觀的記事の代りに、固陋偏狹なる教訓が隨所に割據し、明晰なる印象を留むべき行爲的記載の代りに、理屈張りたる事項が掲げられ、具體的ならずして抽象的に傾き、淳朴ならずして鄙野に流れて居る。斯の如き教科書を以てして、よく六七歳乃至十七八歳の子女を教育し、

第四章 學校の精神的殺人罪

圓滿なる効果を擧げ得べしとせば、それは世界の不思議である、奇蹟である。

かやうな教科書を使ふよりは、首尾連續した、一部完結の書物を用ふる方が、寧ろ得策であるに相違ない。其の方が生徒の趣味を喚起するにも、智識を増加するにも、遙に有効である。よしそれ等の長所がなしとするも、少くも個性や人格の統一を攪亂する恐がない。之だけでも在來の教科書に勝ること萬々である。

第四節

學科の雜多なること ○學校は無用の長物 ○教授の大方針 ○試験制度は兒童の發達に對し大なる眼きの石 ○教育上の美果とは何ぞ ○滿天下の人士の猛烈願起せんことを希ふ

單り教科書の不完全なるのみならず、現今學校に於て授くる學科も極めて雜多で、課目の配當と云ひ、教授法と云ひ、全く支離滅裂の觀がある。學科は恰も順序を誤つた幻燈の繪の如く、出たと思へ

ば忽ちに引込まざる、故、生徒の受くる印象は、電光石火の一瞬時に過ぎないのである。教授法もまた此の編の初めに述べた如く、匙で掬つて注ぎ込む流儀で、而も匙が護謨細工のやうに自在に伸縮せぬ故、生徒の腹加減は、毎も適度を得ぬのである。

今日の學校は、何時までかやうに散漫な、粗雑な、斷片的智識を注入して、徒らに兒童の活力を銷磨する所存であるか、測り知ることが出來ぬ。然し此の弊風にして革まらぬ限りは、學校は害あるとも益なかるべき無用の長物と云はねばなるまい。之れを濟ふの第一着手として、予はこゝに教師諸君の猛省を促さんとすることがある。即ち全局の觀察を明確にして、冗漫な課業を節減し、大綱を授けて、枝葉は生徒自身に會得せしむることを教授の大方針とすることである。かく云へば説く所が陳腐のやうにも、不得要領のやうにも聞えるが、此の大方針が得て閑却され易いのである。故に特に教師諸君

第四章 學校の精神的殺人罪

の三省を促すのである。何時もく、縮を折詰にするやうに、生徒の頭腦に匙で拗つた智識の斷片を排列して居るやうでは、彼等の頭腦は瞬く間に満員の札を掲げねばなるまい。而も其の切つて箝めたやうな智識が充満したところで、敢て融通が利くと云ふ譯でもない。社會人生の事は、爾く型に箝めたやうな者ばかりではない。型に箝めたやうなものは、學校に於ける諸般の形式と、學期學年の試験制度位である。學校が試験の爲めに——即ち一個の試験執行所として設けられてあるものならば、それでも事は濟まうが、豈夫さう云ふ譯でもあるまい。抑も試験なるものは、兒童心身の發達上、大なる躓きの石である。斯の如き障礙物は、出來得べくんば此の世の外へ抛り出したい程のもの、それを學校の制度にされては甚だ困る。學校は生徒に活用の出來る智識を與へ、事に當つて吾が意見を主張し得る確乎たる人物を造らねばならぬ。然るに今日の如く毎日五六

時間も、生徒の心身の發達とは風馬牛の授業をして、なほ其の上は無益な試験制度までを設け、生徒の淘汰を圖らんとするやうでは、役に立つ人物を養成すること甚だ覺束ないのである。また縮の折詰的に注入されたものは、長く記憶に存するものではない。見る間に煙の如く飛散してしまふのである。實に今日の學校は、最も飛散し易い事を、最も飛散し易く教へて、而もそれが飛散しないやうにと祈つて居るのである。甚だ以て得手勝手の話と云はねばならぬ。若し假に、最も飛散し易い事を詰め込まねば、教育にならぬと云ふならば、吾々も大に學校に同情を表して、飛散し易いものが、飛散しないやうな工夫を考へもしやうが、幸にさる面倒な工夫は不必要なのである。忘られるだけはみな忘れて、さて最後に残つたものが、即ち教育上得たる美果である。此の美果を最も多く所持するものが、即ち最も多く教育ある人である。但し最後に残る美果

第四章 學校の精神的殺人罪

とは、幽玄なる趣味、激潮たる感情、高尚なる理想、究極なき想像力など、凡て立派なる人格に缺くべからざる要素を云ふのである。

こゝに於てか予は絶叫せざるを得ぬ。今日の學校は、教育の主義方法兩つながら當を失して居る。其の結果兒童の個性を破壊し、天與の才能を滅却し、精神的に兒童を殺して、徒らに器械的人間を作りつゝあるに過ぎぬと。今日立派なる人格を要求するの聲、益々高きを致せるの秋に當り、苟も教育に關係ある滿天下の人士は、よくこれ等の事情に顧み、猛然蹶起して、一舉此の積弊を打破し、革新の實を擧げられんこと、これ予の切望に堪へぬ所である。

第五章 未來の學校

第一節

幼稚園は幸福の如し○父母の誤解○兒童の特性を觀察すること○幼稚園は粘土工場の如し○雷同と輿論と統一の精神○自己を試験する條件と其の問題○情操の養成○賢母養成の必要○幼稚園は如何に改良すべきか

自己を自由に且つ完全に發揮し得るやうな、理想的學校が、遠き或は近き將來に出來上つたと見て、醒むれば南柯の一夢であつた。今其の臚げな記憶の迹を辿つて書き綴るものは、固より一場の夢物語、敢て今日の學校組織に革命の火の手を揚げやうと云ふ心ではない。否、假令ひ其の心であるとしても、今日なほ其の時機にあらざるを奈何せんである。

先づ第一に予の夢に入つたのは、幼稚園や小學校が消滅して、家

庭教育が之に代はるところであつた。

其の光景は、夢ながら實に羨望に堪へぬものであつたが、さて讀つて今日の幼稚園を如何にと見れば、三四才の子供を捉へて、最早之を團體扱ひと爲し、役にも立たぬ手細工などをさせて居る。之で立派に人間を仕立てる基礎が立つと思つて居るのであらうけれども、何のことはない、桶の中へ里芋を轉がし込んで、芋洗ひでゴリ／＼搔き廻しつゝ洗ふやうなもの、どの芋も清淨きんじやうになるかは知れぬが、毛も皮も擦り剝かれて、白く爛れた肉が飛び出すのである。何人でも自分の幼少時代を回想して、今の幼稚園の子供と比較して見れば直ぐに解ると、野や山や海や川に、嘻々として自由に遊び廻るのと、幼稚園の芋桶の中で、委細構はず搔き廻されるのと、果して孰れが心伸び氣張り、思考力、想像方に利する所が多いであらうか。

今の幼稚園の主義は、自然の獨りを樂むよりは、芋桶の中での共

同の樂を取らせやう、仕事も必要であらうから、手細工なりともさせて置かうと云ふに外ならぬ。然しながら教育の眞の使命は果して那邊に存するであらうか。惟ふに今日の人生は、無用の形式や繁文縟禮の攪拌する所となつて、將に本來の特色を没却せんとして居るのである。故に此の煩雜を棄て、簡素に歸り、人間本來の特質を發揮するやうに努めるのが、即ち教育の使命ではあるまいか。然るに今日の幼稚園は之と正反對の舉に出で、人生を擧げて黄茅白草、滿目蕭條たる光景に陥らしめんとして居るのである。洵に恠むべきこと、云はねばならぬ。

眼を轉じて父母が子供に對する有様は如何にと見れば、此處にもまた數多の誤解が行はれて居る。鏡裏に吾れと似たる子供の微笑するを見て狂喜し、鏡を手より離さざる子供あれば、母は直に此の子供に冠するに、おしやれの名を以てする。何か頭の中が混雜して居

た爲めに、命せられた仕事を等閑に附したり、聞えなかつた爲めに返事をしなかつたりすれば、父は直に此の子供を呼んで怠惰者強情者と云ふ。物忘れをすることは、成人には殆ど常であるに拘らず、子供が些細な事柄を忘れて、満足な答辯をしかねることがあると、直に之を嘔吐きと罵る。未だ所有權の何たるかをも辨へぬ子供が、たま／＼人の物に手を觸れるとあれば、之れに盗人根性ありと速断し、後世恐るべしなど、杞憂を抱く。また甘き冥想に耽つて、管々しき俗事に頓着せぬ少年があれば、目して放心者と見做す。焉んぞ知らん、これ等の事が、みなそれ／＼兒童の特性を臚げながら示すものであることを。故に兩親たるものは當にこれ等の現象によつて、兒童の長所、短所、性癖、特質等を看取し、之に對して適宜の手段を講ずべきであつて、決して徒らに叱咤し、空しく歎息して居るべきではない。假に上に云へるが如き現象が、明かに兒童の缺點、即

ち強情、虚偽、懶惰等の表徴であるとしても、罪は兒童にあるのではない、彼等をしてこゝに至らしめた原因に罪があるのである。但し其の原因に至つては、種々複雑なものであらうから、よく之を精査した上で、根本的治療法を施さねばならぬ。無暗と罪のない兒童を罵つたり、罰したりするのは、方角違である、冤罪である、非道極まるものである。

かく明々白々の事實なるにも拘らず、當代の教育ある父や母が、なほ其の弊を匡正する能はずして、上述の如き誤解に陥るるのは、彼等が早くより子供を幼稚園に托して、親しく其の行蹟を観察する機會に乏しく、或は機會があつても、觀察に努めぬからである。かくて子供と父母との間に生じた誤解は、年を追うて著しくなり、遂には一家の大なる不幸を醸すに至るとは、世上に類例の多いことであつて、父母たるもの、深く注意すべき所である。之を避くるの道

は、父母に於て吾が子の人物を精密に觀察し、強ひて鶴の脚の長きを截らんとせず、鴨の脚の短きを補はんとせず、各々其の性に從つて、長所を發揮せしむべきである。無より有を生ずることは固より出来ぬが、閉ぢられて居るものを開くことだけは誰にも出来る。吾が子に天才が具はつて居らぬものならば、如何に叱咤督勵するとも、天才の人とはなれまいが、然し元來所有する稟性を遺憾なく發揮することは、出来ぬかぎりでない。要するに父母たるものは、よく其の子の性を知悉して、安んずべきに安んじなければ、遂に適當な教育も施すことが出来ず、家庭の幸福も得られないやうになるのである。

然しながら常に子供の傍にあつて、遊戯の際も勉學の間も、精細なる觀察の眼を放つて、其の特性を看取することは、なか／＼容易な業ではない。殊に多數の子供を有する父母には一層困難である。

幼稚園の芋桶の中に於て、一々其の特性を見出すなどは、更にまた幾層の困難を重ねることである。此の點から云ふも、幼稚園の教育は、不完全を免れぬことが明かである。

尤も今日の幼稚園は、右の如く兒童の特性などに注意する必要を認めない程に不完全なものである。何となれば假に其の注意が出来たとしても、悲しいときには特性に應じて、それ／＼適當な教育を施すに堪ふる實力も組織もないからである。先きには予は幼稚園を芋桶に譬へたが、今は之を粘土工場に比較しやうと思ふ。蓋し幼稚園に於ては、種々性質の異なる兒童を一緒に捏ねて、粘土のまゝ小學校と云ふ人形屋へ送る。小學校では之を國民教育と云ふ型かたに入れて、人形の輪廓をつける。それより中學大學と云ふ順に、數多の人形屋の手を経て、終に立派な、然し口も手足も運動の叶はぬ人形が出来上るのである。

かの獨逸人の精神などは、どれもこれも軍服を着たやうに揃つて居るが、之は云ふまでもなく幼稚園以來の紀念である。此の軍服着用精神は、名將の號令の下に、一人の兵卒の如く行動すると見れば、流石に其の統一、其の整調、眞に嘆美に値ひするものともなるが、一犬虚に吠えて萬犬實を傳ふると云ふ譬に洩れず、多數の意見と見れば是非を問はず雷同する底のものならば、甚だ有難からぬ次第で、吾々には孟子の所謂、心に於て疚しからざれば、千萬人と雖も我れ往かん底の氣概が、遂に慕はしくなるのである。實に現代の文明を鼻にかけて居る彼等は、太古野蠻時代の不道徳を復活させて、多數を頼みに勝手我が儘の振舞を爲し、輿論と云ふ美名の下に、正義の人を誘つて、動もすれば却つて悪い方面へと、歩調を整へさせやうとして居るのである。かやうに歩調の整ふ原因をば、遡つて今一度調べて見ると、彼等は先づ生徒としては、絶対に校則に従へと

教へられ、學友間の制裁としては、協同一致を迫られ、兵士としては、軍規に盲従すべく強ひられた人々である。かゝる徑路を辿つて來たのであるから、今更吾が意見、吾が良心などを省みる邊のあらう筈がない。悪いと思つても輿論ならば致し方がない。輿論に従はぬものは、社會の賊である、國家の仇であると、一口に云はれる。辯論無用、亂暴極まるドレフュー事件も、無法なるポリア戦争も、輿論の聲の下に、壓制者の勝利に歸する今日ではないか。

然しながら人集つて社會を成し、國家を成す以上、統一せる輿論と云ふものがなければ、國家社會が一日も存立し難い。して見れば幼稚園に於ても、統一の精神を吹き込む必要があるではないかと、かう云はれる人も必ずあらう。成程統一も國家社會の爲めに必要には相違ない、然し今日の幼稚園にて教へる所謂統一の精神の如きは、眞の統一にあらずして、一の雷同に過ぎぬのであるから、それは贊

成し難いと云ふのである。然し此の統一と云ふことに對しては、予に於ても別に一つの方策がある。之は幼稚園などでは無論實行が出來兼ねるが、家庭ならば必ず成功する。それは大政治家スタインの言葉の『人間の勢力及び價值は、其の人の興奮の程度如何によつて定まる、教育は即ち此の興奮の程度を高めるにある』と云ふことを實行するのである。即ち兒童が極めて幼少なる頃より、何事にも自ら選擇し、自ら營むの自由と、それに伴ふ危険とを教へ、吾が意志の權利と、それに伴ふ責任とを知らしめ、自己を試験する條件と、其の問題とを與へてやるのである。此の危険、責任、問題の三者は、自然彼等をして、小にしては一家、大にしては國家社會の一員たるべき必要と幸福とを自覺させるのである。而して斯の如き自覺心の養成を經來りしものは、かの芋桶上りのものなどとは、月魁の差がある。かれは一個の屋根瓦の如きものであるが、これは實に一個の

細胞の如く、團體の一員であるとともに、自ら一個の活潑々たる有機體である。かゝる人間は決して雷同の弊に陥る恐がない。かゝる人間によつて喚び起された輿論こそ、眞の輿論であつて、國家社會の福利を圖る上に於て、缺くべからざる勢力である。

以上の如くなるを以て幼稚園や小學校は、個性長養に不適當なものであるとが解る。獨り個性のみならず、情操の養成にもまた不適當である。抑も情操を養ふには、家庭に勝る場處はない。第一家庭は範圍が狭く、結合が固い故に、家族間の感情は自然と濃やかになる。且つ家族生活の自然の傾向、即ち家族相愛の稟性が、日常起居の間に實現して、家族間の愛情は益々深厚になるのである。之に反して幼稚園や小學校には此の温情なく、而も兒童自然の個性的發展を措いて、只管芋桶的要求だけを充たさうとする故、兒童の頭に入るものは、膚淺輕薄な形式的關係ばかりで、其の結果は情操の上に

以所む望を達發の情感的個人

も悪い影響を及ぼして來るのである。且つ幼年時代の軟い頭に受け
た癍痕は、一生拭ひ去ることが出來ない故、單日月の幼稚園教育は、
即ち人の一生を破るものと云つても差支ない。如何に學問があつて
も、交際が圓滑に出來ても、個人としての情操が發達して居なけれ
ば、其の人の價値は零である。何となれば如何に冷靜な理性を持つ
て居やうとも、一掬温籍なる感情がそれに伴はなければ、心身の平
均を失つて、其の人は終に倒れずに居ないからである。且つまた個
人的感情が美しく發達した人でなければ、社交場裡に於て、衷心か
ら圓滿の交際を爲すことが出來るものでない。會ふ人毎に巧に調子
を合せて行くやうなものは、多くは節操に乏しい輕薄者流である。
一人の爲めに命をも惜まぬ程の熱誠ある人ならば、萬人の爲めにも
矢張り正義を主張するに極まつて居る。これ予が特に個人的感情の
發達を望む所以で、幼稚園の教育が之に適せず、家庭が此の點に於

子供の精神の破壞

て遙に優つて居ることを主張する所以である。予が夢にまで、家庭
教育の隆興を見たのも、之が爲めであらう。

然しながら既に家庭衰微論の條に於ても述べた如く、今日の社會
は殆ど無家庭の状態で、父母ともに外に出で、家を省みるに違な
きものが多い。よし母が家にありとも、彼等に教育なければ、子
を害ふこと幼稚園や小學校より更に甚だしいのである。こゝに於て
か吾人は、メリー、ウォールストン、クラフトが、百年も前に述
べた説を、今日に於てなほ首肯せざるを得ぬのである。曰く、「無智
の母は子の肉體を殺さぬまでも、教育の道を知らぬ爲めに、子の精
神を破壞してしまふ」と。また曰く、「當才より五六才に至る時代は、
人一生の性格を定める大切な時期であるのに、子供を一切子守役の
手に委ねて置く。此の子守役は、多くは主人から受ける虐待を、其
の子供に返報しやうと云ふ量見であるから、云はゞ敵の毒手に可愛

い子供を渡すやうなもの。かくて子供は學校に送られる。其のまた學校は、親の怠慢に基く惡弊を矯正しやうとして、却つて惡徳の種子を蒔くのである」と。實に今日の狀態は其の通りで、どちらへ向いても遺憾のことが多いのである。故に將來に於ては、よく母を教育して、母の最大の任務は子供の教育にあると云ふ大方針を確立し、それが着々實行され、而して多くの賢母が輩出して、幼稚園や學校の不完全なる組織から、子供を救ひ出すのを待つより外はない。但し現今の狀態のみに就て云へば、此の不完全を以てしてなほ且つ幼稚園の方が、復讐心に充ちて居る子守や、育兒の何たるを知らぬ邪慳な母よりも優な場合がある。芋桶の中でも幼稚園に拾はれる方が、まだしも子供の幸福になる場合もある。故に幼稚園の弊害を知りつゝも、なほ之に愛兒を托さねばならぬと歎する人もあらう。返すくも遺憾の次第と云はねばならぬ。

かくの如く幼稚園の必要なほ止むなしとすれば、せめては之に出來得るだけの改良を施したい。幼稚園をして、自由氣儘に兒童を遊ばせる——即ち兒童の空想を恣にさせる——一個の自由郷たらしめ、而して兒童を樂ませる道具や、遊び友達を供給する場處たらしむるに止めたい。保姆の如きは、兒童が互に相害ふ如き場合の外は、濫に之に干渉せず、遊戯を教へ童話を語るも、みな受働的で、遊戯娛樂の間に隱見する兒童の特性を観察する場合に於てのみ、能働的であつて欲しい。また母親に於ては假令屢々ならずとも、機會を得る毎に幼稚園に赴き、兒童の遊戯交遊の有様を、成るべく客觀的に觀察されたい。斯の如く保姆と母親と互に相助けて、熱心なる觀察を續けて行つたならば、兒童の性質も多少解つて來るであらう。一體人の性質を悉く知ると云ふことは不可能である。殊に吾が生みの子は解り難い。愛に溺れて居る場合には、殊にくら然りである。た

子供を愛する熱情のみ熾んで、眞に子供の性質を知らねばこそ、角を矯めて牛を殺すの愚を演ずるに至るのである。語に曰く、『志立つは事業の半なり』と。予は云はん、『性を知るは教育の半なり』と。

第二節

小學校の教育を家庭に移すべし○家庭の長所○小學校の長所○家庭は社會生活を縮寫せるもの○學校が與ふる交友の利害○就學年齡を延期すべし○偉人の生立ちは何の○ゲーテの受けた理想的教育○今日の學校が好成績を挙げ得ぬのは何故ぞ○今日の學校の模範とする生徒○學校に於ける個性の擧げ

單り幼稚園のみならず、小學校の教育もまた家庭に移して貰ひたいのである。家庭では學校の觀察の届かぬ所まで目をつけ、手を入れることが出来る。學校のやうに杓子定木を振り廻さずとも、兒童の胃の狀況に従つて食物に手加減を施すことが出来る。學業を仕込むにも、兒童の發達の程度如何によつて、早くも遅くも便宜に其の時機を定めることが出来る。また活動性に富んだものには活動の便

宜、讀書好きのものには讀書の便宜を圖つてやる事が出来る。要するに身體の發育も、精神の満足も、みなそれ〴〵適度に顧慮してやる事が出来るのである。學問は無理に詰め込むべきものではない。兒童自身に何事か知りたいたい聞きたいとの心が起るのを待つて、智識を與へるやうにしなければならぬ。而も斯の如きことは家庭にして初めて爲し得るものである。なほまた右の如く兒童の觀察力が動き、活動力が躍る時に始めた仕事は、勞少くして益する所が多い。學校にては多數の生徒を少數の教師が取扱ふので、一人々の生徒に對して、適當な處置を取り得ぬのは勿論であるが、家庭にては少數の子供を父母が指導するのである。加ふるに子供の友達は兄弟姉妹であるから、事がいつも圓滿に理想的に運ぶのである。尤も學校に於ても、教師の數を非常に増加して、教師の受持時間の制度などを打ち毀し、萬事家庭的組織にしたならば宜いかも知れぬが、それ

は到底實行不可能である。

然しながら學校には、またそれ／＼の長所があると云ふ人もあらうが、よしあつたとしても、それ等は洵に云ふに足らぬものである。學校派の人は必ず云はう、學校には秩序がある、教授法が研究されて居る、系統が立つて居る、主義が確立して居る、其の外曰く何曰く何と、然し予の見る所を以てすれば、かく學校派のものが、金城湯池として並べ立てる所のものは、詮じ來れば長所にあらずして寧ろ短所である。義務に忠なる觀念も、眞面目な勉強心も、規律正しきことも、その他凡そ健全なる教育に屬せん程のことは、一切家庭に於て却つて容易に教へることが出来るのである。而も學校の爲すやうに、形式や小刀細工などを弄せずして、自然に行はれるのである。論者はまた學校の長所として、兒童が夙くより團體の一員となつて、社會に於ける共同生活の義務を學び、公共心を發揮するに至

ると云ふであらう。然しながら團體を成して居るものは、學校のみには限らない、家庭と雖どもまた自然に一つの團體を成して居るのである。故に家庭に於ては公共心が養成されぬと云ふ道理はない。否、家庭の方が、學校よりも遙に實地的である。子供が家庭の一員として、父母を戴き、兄弟姉妹互に相助け、一家の幸福繁榮に協力する有様は、宛然社會生活の状態を縮寫したものである。之を大にすれば、其の儘にて社會ともなり、國家ともなるのである。學校に於て學び得る公共心の如きは、多くは形式であり、空論的であつて、實地に遠いと云ふ譏を免れぬのである。

論者はまた學校を辯護するに、學校がよく兒童に交友の利益を與ふる點を以てするであらう。成程此の點に於ては、學校に幾多の便宜がある。然し遺憾なことには、學校の與へる交友生活には、數多の危険が含まれて居る。家庭は學校の如く、多數の友達を供するこ

とは出来ぬが、危険分子が交つて居ない。蓋し學友間の交遊より生ずる危険とは、云ふまでもなく種々の悪影響悪感化である。例へば多數を頼みに個人を意思を壓迫し、多數の意見には是非を云はず屈服せしめる如き、殊に恐るべき弊害である。之は漸次兒童の卑屈心を醸成し、その個性を害ふこと實に想像以上である。衣服が少しく普通のものゝ異つて居れば、直ぐさま冷評を加へる。帽子の形が可笑しいとて罵る。袴の丈が長いとて悪口する。仔細にこれ等交友の嘲罵冷評、多種多様な迫害を観察し來れば、何人も學校の交友なるものに、眉を撃つるを得ぬであらう。こゝに於てか學校の唯一の長所たる、多數の交友を供給すると云ふことも、さほど有難くないものと論結せざるを得ぬのである。

頭上よりは例の均等主義が、ひた押しに兒童の個性を壓迫し、前後左右より交友の干渉が之を援けて、之でも立てるか、之でも動け

るかと思ふ有様である。學校派の人は、彼れ是れと辯護の辭を費すけれども、要するにそれは、一般の秩序の爲めに、主義の爲めに、煩瑣なる規則の制裁を要するので、萬止むを得ぬ次第である、と云ふに過ぎぬのである。然し抵抗力も何もない兒童に、かくまでも烈しい壓迫を加へて、それで止むを得ぬと濟まして居るのは、餘り無責任なこと、云はざるを得ない。眞に止むを得ぬならば、せめて學齡でも高めたらよさうなものである。抑も教育の第一の使命は、兒童の個性を發揮させる點にあるのではないか。總ての偉人の傳記が一樣に示す如く、均等主義の教育が早く既に六七才より始まるのは、明かに早過ぎるのである。百歩を譲つて、若し均等主義が教育上是非とも必要であると云ふならば、宜しくかゝる教育を施行する時期を遅くして、稍々個性も固まり抵抗力も具はつて來るのを待つべきである。今日の如く濫に手を斷ち足を斷ち、凸きを削り、凹き

を埋づめ、飯釘補綴を事として居るやうでは、死んだ人形は或は出來やうが、活きた人物は一人半個たりとも終に造り得ぬであらう。かくて進み行かば人類は次第に退歩するより外はない。

思索發明の功を遂げて、世に多大の貢獻をなした偉人は、其の多くが不規則な學問をした人である。或るものは毫も學校に通學せず、或るものはたゞ僅に學校教育を受け、或るものは斷續的に校門を潜り、或るものは甲より乙、乙より丙へと、數多の學校を飛び廻つたのである。而してこれ等の偉人に、偉人たるべき機會を與へたものは、多くは偶然の出來事で、ふとした熱心の觀察、窃に隠れて讀んだ書物、戯れに着手した事柄などが、彼れが大飛躍の眞の動機となつたのである。

ゲーテの受けた教育は、其の父の村學究的部分を除けば、洵に理想的であつた。母からは聖書を學び、俳優に就て佛蘭西語を修め、

英語は父と、もに家庭教師の授業を受け、伊太利語は姉の學ぶのを傍聴して覚え、數學は同宿の書生に就て習つた。彼れが最初に數學を應用したのは、ま、ごとの箱を作る際で、後には之を建築術の研究に用ひた。彼れはまた歐洲諸國に散在せる兄弟姉妹と、それらの國語で信書の往復をして、語學を練習し、旅行記を讀んで地理を覚え、後には父と、もに諸國を旅行して、百聞に勝る實學をした。

かく述べ來れば、人或は異議を唱へて、『非凡の天才あるものは少數である。普通の兒童には今日の學校組織が適當である』と云ふであらう。然し其の天才あるものが、何故學校を嫌つて、兎角不規則な學問を好むかの理由を考へて見よ、明かに學校の形式的干涉や個性の壓迫が、其の原因をなして居ることが出来る。而して個性の著しく活動せぬ兒童、即ち餘りに特色なき普通の兒童と雖も、此の干涉壓迫に對して苦痛を感ずることは、他の天才あるもの

と少しも異ならぬのである。

往時の學校は、兒童に少許の課目を教へて、それを無暗と暗誦させた。其の教授法の拙劣なること、今日より見れば殆ど笑ふに堪へた有様であつたが、それでも今日の所謂完全なる學校程には、兒童の個性を害ふとがなかつた。今日の學校は、教師に十分の素養があつて、専門家の研究した教授法の下に、出来るだけ甘味を付けた精神的食物を、殆ど嚙んで含めるやうにして生徒に授けて居る。此の完全なる教授法を以てして、猶且つ好成绩を挙げ得ぬのは、抑も何故であらうか。考へるまでもない、それは學校が徒らに多岐亡羊の課目を授けるからである。餘りに世話をし過ぎるからである。

學校では極く温和な従順な兒童を最良の生徒と云つて居る。然し之は最も個性の薄弱な、最も特色の少い生徒を模範とするのであつて、初めから定木が曲つて居るのである。消極で、受働的で、極め

て制御し易い生徒であれば、學校の受けは甚だ宜い。之に反して少し特色があつて、例外の事をしたたり、教師に楯突いたりする、活動性の盛なものなどは、強情者とか難物とか、あらゆる悪名稱を冠せられる。かやうに六ヶ敷い面倒な學校生活を兎に角無事に切り抜け、自分の個性の半なりとも保存して、『學業優等品行方正』の賞狀を卒業證書と共に貰ふ生徒は、流石に偉いに相違ない。氣輕で、愛嬌があつて、どの方面にも小才の利くものでなければ出来ぬ業である。

今日の所謂完全な學校に於ては、生徒が其の個性を齷弄されること、恰も一葉の舟が洋中に漂ふ如くである。幾年間の久しき、毎日毎週、號鐘！數學、號鐘！修身、號鐘！歴史、號鐘！博物、と云ふ風に、殆ど應接に遑なき有様。それで歸宅後は、宿題が山のやうにある。辛うじて答案を作り、下調を了り、而して翌日學校に出れば、鹿爪らしい教師のやかましい質問がある。かやうに間斷なくやられ

ては、生徒も大抵馬鹿になつてしまふ。たまく／＼之に氣が付いて、非難の聲を揚げる父母があつても、改革を促す人があつても、當局者が學校組織の綱領を振り翳して、頑として動かぬ間は、如何ともすることが出来ぬ。教育の専門家また大局を見るの明なく、或は漫に革新を毛嫌ひして一に舊套に安んじて居る。教育の事業は之が爲め一向改革の緒に就かぬのである。

學校の改良は、家族や社會のそれと同じく、日進月歩の勢力の下にあらゆる迫害に打克つて、着々實行されねばならぬ。然るに今日の學校は、之と全く反對の舉に出で、舊慣のみを墨守して居る。而して當局者は單に學校の數や、器械の整頓や、校舎の設備などを標準として、國の文華を誇稱して居るが、甚だ以て潜上の沙汰と云はねばならぬ。要するに學校の數は如何に多くとも、校舎や器械は如何に整頓せりとも、それは外面の裝飾に過ぎぬ。外面は如何に善盡

し美盡せりとして、社會の進運に伴つて進歩し革新されぬ舊式の學校は、社會の爲め有用の人物を養成することが出来ぬ。かゝる學校は、其の數如何に多くとも、少しも誇稱するに足らぬのである。

第三節

萬人共通の能力の數學や文法は理解力を進めるに足らぬ。○人生及び自然界の活學問。○教育者の唯一の仕事。○一と通りの生活に事を缺かぬだけの學問。○未來の學校の教育法。○未來の學校の教科書。○未來の學校の庭園、遊戯、運動。○未來の學校の建物。

ゲーテの所謂『吾人の幸福は能力の發達にあり』は、老幼に通じて千古謬らざる金言である。俊秀なる兒童には特に勝れた能力があるので、幼少の時代からそれが人の注目を惹き、従つて益々之を發揮させ、其の幸福を増進させることが出来るのであるが、さりとて別に特色のない兒童でも、萬人共通の能力は必ず有つて居る。故に教育者の指導宜しきを得れば、矢張り其の幸福を増進することが出来

るのである。例へば記憶力の如きは、共通能力の一つである。今の人には記憶力の焰の上に灰をかけるので、昔に比べると甚だしく此の能力が衰へて來たが、昔は何れの國民も、記憶力が旺盛で、長い歴史や詩歌などを、よく暗記して居たものである。思索力の如きもまた共通能力の一に數ふべきもので、哲學的のそれは別として、一般の推理判定の力は、誰の頭にも潜んで居る。就中大切な共通能力は、かの感情なるものであるが、之も近頃の學校組織の爲めに、大なる壓迫を受けるやうになつた。

數學や文法が、子供の理解力を助けると思ふのは、當今の教育者間に蟠まれる捨て置き難い誤解である。勿論これ等の學科とても、深く其の堂奥に入つたならば、理解力に裨益する所も多いであらうが、小學生徒の頭腦を苦める位の程度のものでは、効能が甚だ覺束ないのである。並外れてかゝる學科に興味を有し、特別の才能ある

ものならば、興味につられて自ら深い研究も試むべく、従つて理解力を進めることもあらうが、其の然らざるものに至つては、學校で少しばかり授業を受けたところで、理解力に大した増減を感じないのである。

數理や文法の如きは、直接に吾々の智を闡くことが出來ぬ。吾々は生命を有するものである。故に直に取つて吾々を裨益するに足るものは、矢張り生命あるものに限る。即ち人生及び自然界の活學問こそ、吾々を裨益するに最も適當して居るのである。されば人類及び自然は、如何なる生活を爲すか、如何なる美觀を呈するか、如何なる活動を爲しつゝあるかを教へる所の、かの博物、地理、歴史、美術、文學の如きこそ、吾々の研鑽に値ひするもので、これ等の學科は吾々の觀察、思索、判別の力を養ひ、感情の發動を自由にし、よく萬物を調和統一させる力を有するのである。かやうな現實の智識

の熱流を、兒童に注入するに當つては、學校も家庭も、其の源泉を彼等の腦裡に直流させるやうに努めねばならぬ。然るに學期を分ち、試験を行ひ、小刀細工に類する形式的掘割を通して、之を流し込まうとすれば、肝腎な熱流の熱が失せ、有益なる含有物は途中に沈澱してしまつて、兒童の頭に這入るものは、たゞ水のやうな上澄ばかりとなる。

均等教育などの議論は、最早吾々の實學界に跋扈すべき資格がない。彼等は固陋な教育者一派の樂屋へ引込んで居るが宜からう。個人の能力に統一を圖るのはまだしも聞えた話であるが、萬人を同型に締め込まうとは、真に無謀の所爲と云はねばならぬ。かゝる無謀を學校教育の根本主義にして居る教育者は、また數理や文法で人間が造れるものと思つて居るのであらう。洵に憫笑すべきことゝもである。

かゝる人々に向つて、今更改良とか進歩とか、手緩いことを云つても埒があかぬ。右の如き腐敗分子が、たゞの一ミリグラムでも存在して居る間は、革新の實は擧がらない。暴風暴雨一時に來つて、教育界にノアの洪水が押寄せて來たならば、吾々の本懐は初めて達せられるのである。水退いて後、吾々は學校などは勿論建てぬ。一大葡萄園を作り、教師を園丁と改稱して、兒童の唇に葡萄の房が觸れる程の高さに棚を掛けさせる。而して此處へ兒童を連れて來て、欲するまゝに甘漿を口づから吸はせるやうにする。從來教師が實を摘んで、其の搾つた汁へ、アルコール、鐵、ザルチルなどを加へ、更に數十倍の水を混ぜて飲ませたものを、葡萄棚から其の儘直ぐ吸はせるやうにするのである。

予は今日の學校が一日も早く滅亡せんことを希望するのである。故に今日の教育者の唯一の仕事は、一日も早く學校が不必要になる

やうに盡力することであらうと思ふ。而して煩瑣な系統や形式に據る他力教育の代りに、兒童に自力修養の風を鼓吹する教育が成立つやうに工夫するにあらうと信ずる。現今に於ては、兒童は幼稚園の初めより、諸學校を卒へるまで、寛嚴常なく、冷熱定めなき、教師の掌上に翻弄される所の、一個の土偶に過ぎぬとは、予が既に再三述べた所である。最も自由に最も放任に見える教授法でも、なほかの均等主義の毒を含まぬはない。加ふるに學級の編成が、全然兒童の性情や素質の異同を標準とせずして、單に年齢と學力とのみで以てする故に、恰も家鴨と鶏と一緒に飼養するやうなもので、水の中では鶏が困却し、畑の中では家鴨が迷惑する。そこで勢ひ無理な折衷もしなければならぬこと、なるのである。

兒童をして自ら思考せしめ、自ら勞作せしむることは、教育の抑もの序幕より應用して少しも差支ない。教育者は之によつてまた兒

童の觀察を遂ぐべきである。かゝる方法によれる觀察にして、精密に行はれたならば、何人も均等主義を捨て、個性主義を取るに、たゞ其の早からざりしを悔ゆるであらう。かくて兒童の能力に應じ、性質に準じて、讀書、遊戯、手工、乃至は修學旅行、圖書館の參觀博物館の縦覽など、それ／＼時機の遲速、分量、度數等を考へ、宜しきに従つて指導すべきである。また兒童の極めて不得意な事柄は、必要の最少限を學ばせることにすべきである。一通りの生活に事を缺かぬだけの學問は、敢て多きを要せぬ。普通の書物を読み、通俗の文を綴り、鉛筆に水筆に、簡単な物の輪廓を寫し得れば、陰影の濃淡のと、美術家めいたことは要らぬ。幾何學の觀念一通りと、加減乗除の運算、分數小數の意味位が解れば、數學も其の上は骨折つた割に効能がない。地理は新聞などに載る地名を地圖に引き當てる程の力あれば事足るべく、衛生の筋道あらかた合點行けば、博物生

理も其の上は要がない。之になほ外國語の智識が少しあれば、何處へ出しても立派なもの、普通一遍の世渡りは、先づ無難に出来るであらう。

之だけは智識の共通元素で、何人でも必修の要がある。譬へば刺繡に用ふる糸と布との如きもの、何人も先づ整へて置かねばならぬ。然し其の上に花鳥を繞ひ出すも、山水を粧點あしらふも、それは各自の心次第次第で、其處にまた人々の特色伎倆が、發揮されると云ふものである。故に必修の要素にして具はれば、神人雜居の古代に溯つて、うしろめ鈿女尊の古樂に耳を傾けることも、亞刺比亞の沙漠に彷徨して、オーシスの清水に飽くまで喉を潤すことも、北國の長夜に清明の天空を望んで、神秘の憧憬を恣にすることも、總てみな意のまゝに、書齋の裡に書架を擁して、頰杖突いて出来るのである。

未來の學校は、これ等の素養があるものを受取つて、こゝに初め

て學校教育を施し、好む所を研究させるので、勿論卒業證書もなければ、賞罰もない。試験もない。全般の出来によつて成績を判定する。卒業はたゞ自然と人事と過去と現在との智識を以て社會に出るので、空な卒業證書に宙乗りして、柄にもない高い處へ舞ひ登るとは事違ひ、極めて安全なものである。

其の教育法は、勿論今日のものとは正反對である。第一、教師は自ら傍觀者の地位に立つ。彼らは生徒に書籍の選擇、研究の方法に就て注意を與へこそすれ、己れの觀察、判斷、智識などを講義して聞かせたり、標本として示すことは遠慮する。而して時々生徒から研究の報告書を取つて、彼等の進歩の程度を調べ、やがて適當な時機に、概括的問題を與へてやる。教師の最も力を注ぐのは、生徒をして獨力を以て深い觀察に入らしめ、難問を解決せしめ、巧に參考書を利用せしめ、補助の材料を輯集せしめ、而して研究の目的を貫

かしむるにある。かくて生徒の申請を待つて、初めて必要な事項に就き試問を爲し、彼等をして自力修業の成功を祝さしめ、勇氣を振起せしめたる上、更に將來に向つて鵬翼を張らせるのである。

手を束ねて教師の講義を聴聞し、教師の指導を待つて居るやうでは、生徒の觀察力は決して増進せぬ。習字でも一點一畫、叮嚀細密に誤りを訂されては、却つて進歩しない。模型ばかりに依頼して居ては、所謂壘の上の水練で、實際の役には立たぬ。これ等は最も大切なことで、教師たるもの、深く省みなければならぬ所である。生徒を促して自ら研究せしめ、自ら缺點を見出さしめ、自ら問題を解決せしめ、突飛な間違の外は、濫に干渉を加へずして、完璧な研究法、十分な表式を自得せしめたならば、こゝに初めて真正の修養を積むこととなるであらう。

教科書は悉く活氣と趣味とに充ちて居らねばならぬ。寄木細工的

讀本組織を止めて、首尾完き一部單行の書物を用ひるやうにするが宜い。尤も其のうちの煩瑣な所や、六ヶ敷い部分は削除して、生徒の能力に適應させるやうに訂正するは勿論である。圖書館は即ち學校の至善、至重、至要の教室で、學校の最も主なる仕事は、書籍の貸出しに歸すると云ふやうにならねばならぬ。

予の夢に見た學校は、何れもみな廣大なる庭園を備へて、直接に生徒の美感を涵養して居た。家庭のみならず、學校に於ても、庭園の花卉を整へ、時に或は之を室内の花壇に移し、四季ともに教室を飾る如きは、最も輕便に美を味はしむる仕方である。

天氣が悪い爲めに野外の運動が出来ぬ日には、手工に従事し、鉢植や花卉の手入れを爲し、または種々の室内遊戯を爲して運動を補ふ。斯の如きは極めて單調で、且つ直接の利益もないやうに見えるが、而も様々な能力の源泉が之より湧出するのである。更に生理衛

生の觀念を之れに結び付けたならば、恰も數學に手工と製圖などを連結したと同様、直接間接に、多種多様の利益が伴ふのである。尤も野外運動が出来れば、それに越したことはないのであるから、外出の出来る限りは、常に其の方へ向ふべきは勿論である。何れにもせよ、室内遊戯場と、野外運動場とは、ともに完全なものを備へて置かねばならぬ。嘗て希臘の教育が執つた如くに、身軀の強健と、もに身軀の美を養ふことが、體育の完璧を期する所以であることは、教育者の決して忘るべからざる所である。

手工や園藝には、また間接に大なる利益が伴ふ。數學の應用にも、博物學の應用にもなるは、解り切つたことであるが、更に大なる利益は、兒童が自分で事實に接して、自分で原則を發見する所に存する。今日の學校でも、種々な事實や種々な實驗を生徒に示し、或は生徒をして手づから實驗を爲さしむることもあるが、それはたい教

へられた原則の證明をなすに過ぎぬ。只管理論に拘泥して、宇宙の森羅萬象のうちより、自ら一種の理法を捉へ來るべき、餘裕や機會を生徒に與へやうとせぬのが、今日の學校の通弊である。

未來の學校には、教室などの設備は一つも要らぬ。たゞ多くの室に、多種多様な材料が具備されてあつて、生徒はそこへ來て勝手に自習するのである。室の内外と建物の外廓は、ともに美術工藝の統一的美觀を有し、且つ有名なる美術品の模型または複寫を以て飾られて居る。之が未來の學校の建物である。かくて間接に、生徒の審美的觀念が喚起されるのである。美術の智識は美術の講義を聞かせたならば、或は之を與へることも出来やうが、真に美術を愛する心を起させることは六ヶ敷い。之は常に美術品に圍繞されて、靜に、自由に、また極めて自然に、美を感ずるに於て、初めて起るのである。宗教でも文學でも、將たまた此の美術でも、學問として原則を

課する場合の外は、教師が教ふべきものではなく、生徒をして自らそれに向はしむべきものである。其の圏内へ手を引いて連れ込むべきものではなく、圏の近傍に生徒を留め置いて、美の引力に吸込ませるやうにしなければならぬ。

第四節

小説詩文の類を嚴禁するは不可○劣等なる作物の害
○智と情との養成○大家の名品傑作と現時の駄作○
よく觀よく讀むべし

教科書の内容が多岐亡羊なるは、勿論忌むべきであるが、生徒に小説詩文の類を嚴禁するのも、また甚だ愚かな處置である。善良なる感化を與ふる健全なる文學書は、生徒の欲するまゝに、いくらでも讀ます方が宜しい。尤も詩文小説の中には、隨分年少なる讀者に難解の箇處も多いであらうが、難解の箇所は自然面白くないから、彼等はそれ等の處を飛ばして、自分に解る面白い處だけ讀むであらう。

面白く讀んだ處は、必ず何にか役に立つのである。例へば十歳の少年が、「ファウスト」を讀んで面白いと思ふ、其の感興は彼れをして必ず何等か得る所あらしめる。二十歳になつてまた讀む、今度も矢張り面白い。然し十歳の時に得た感興と、此の時の感興とは餘程遠ふ處がある。而も彼れと是れとに寸毫の矛盾衝突もないのである。三十歳になつて讀んでも、四十歳になつて讀んでも、何れも其の時々年齢に應じて感興が湧いて來る。詩の恩澤はいつも變らないのである。實に偉大な詩作物は、年齢の如何を問はず讀んで利益があるものであるから、子供が讀んだとても決して害はない。此の點に於ては、十分な自由を與へて宜しからう。但しかの不健全なる戀愛小説や、其の他種々劣等な作物は、却つて人の詩的想像を感亂し、健全なる觀念を破壊し、趣味を降下させる等、害あるも益なきものであるから、此の種のものには、成人も少年もともに手にせぬ方が安全

第五章 未來の學校

である。要するに小説、詩文を讀む上に於ては、成人と少年と其の利害を同じうするものと云つてよいのである。

今日の進歩した世の中に、無學なものが一人でもあつてはならぬ。假令ひ親が頑迷で、學問を厄介視しても、子は何處までも智識の修養に努めねばならぬ。良教師の指導の下に、偉大高尚な文學美術の感化によつて、智と情とを養つたものでなければ、些細なる誘惑の爲めにも直に乗せられて、墮落の淵に沈淪し易いのである。世が進めば進む程、文學美術の必要が増すことは、予一人の議論ではないのである。

智と情との養成を忽にされたものは、不毛の地に雜草の蔓る如く、雨露に曝される鐵の錆びる如くに、心が瘦せて干乾びて來る。彼等は聖書の如き金玉の文字に接しても、心琴に何等の反響もなく、墮落小説の如き雜草のみが悪影響の根を張り枝を擴げて、宛として薄

に觸れて、あはれ人生の凄寥なる光景を寫す畫題となり了るのである。之に反して智情靜に且つ直ぐなる時は、清き小川の流が、岸の草花や水上に飛び交ふ蝴蝶の影を寫して誤らぬやうに、自然も美術も文學も、みな心の鏡に透射して、長閑な春を其の儘の眺め、人生の價值と趣味とは即ち此處に生するのである。

天才の作物は、無際無限の世界を讀者の前に展開して、至大の感興を與へるけれども、普通一般の駄作物に至つては、多少の趣味はあつても、それは一時的で、却つて吾々の心情を冷却させてしまふ。抑も吾々の想像力や詩的空想は、常に食物を取つて居なければ、身が身を食うて、終に薄に觸れての凄寥たる光景に陥るを免れない。而も其の食物たるや、最も精選の必要がある。兒童は初めに童話の泉を掬し、成長するに従ひ次第に大家の名品傑作の流に汲まなければならぬ。吹けば飛ぶやうな翻々たる現時の駄作の送迎に忙はしくし

第五章 未來の學校

第五章 未來の學校
 て、古典の傑作を味ふことを知らぬやうでは、洵に遺憾の次第である。

自然と人生、文學と美術、何れをもよく觀、よく讀み得るやうにするのが、教育の二大目的で、學校も家庭も努むる所は此處に歸着させたい。よく觀、よく讀むことが出來れば、他は期せずして自然に到達されるのである。

序に一言申添へたいのは、右に述べた想像力なるものは、獨り文學美術の爲めにのみ大切なるばかりではなく、同情心の養成にも、大切な要素をなすと云ふことである。例へば幾多残酷な所業を敢てするものでも、必ずしもみな心から残酷なものばかりではない。彼等の中には、己れの行爲が被害者に如何なる結果を及ぼすかを想像し得ぬところから、知らず識らず此の罪惡を犯すものも少なからぬのである。

第五節

未來の學校に於ける學科○外國語の練習法○季節に従つて學科の配當を變更すること○同一學科を數回反覆すべからず○小歴史學者と小博物學者との修學旅行○科目の統一と聯絡とを專一にすべし

予の夢みた學校では、前既に述べたやうな準備の出來上つた後には、總ての學科を隨意科にして、其の中より自由に選擇を許し、決して必修を強ひない。學科には博物、數學、地理、歴史を初めとして、國語の外に英語、獨逸語、佛蘭西語を置く。語學は講讀、作文、會話ともによく練習させるのであるが、文典は生徒をして其の大意を知らしむるに止めて、深く彼等を追窮せぬ。文典の細則を墨守して、一意之に違はざらんことを努めたならば、出來た文章には、成程文法上の誤謬は少からうけれども、たゞそれだけのことで、文章に生氣もなければ興味もない。従つて人を動かす力にも乏しいのである。文章は決して文法の奴隸ではない、よし多少は文法上の誤が

あるとしても、吾々は寧ろ生氣あり興味に富める活文章を望むのである。

既にして簡単な書物は、大抵理解される程の力がついたならば、生徒は辭書其の他種々の参考書を使つて、有用なる書物を一冊また一冊と通讀し、更に其の要領を談話や作文に試みるやうにする。かやうにすれば、専門的批評眼は具はらぬまでも、文學上の智識は確實に得られるのである。

教師はまた語學などを教へる際に、時々適當な書類を指摘して生徒に薦めるが宜い。但しそれは成るべく相互に連絡あるものを可とする。例へば博物、歴史、地理などの學問と關係のある小説などを薦めるも妙であらう。なほまた教師は時々書物の梗概を語り、其中の二三章を抜いて讀み聞かせ、生徒をして自ら其の書を繙かんと希望を起させるも宜しからう。然しそれが韻文である時は、教師

はそれを節に別ち句に分け、一言一語づゝ解剖的分析的説明などをしてはならぬ。斯の如きは著者に對して殺人罪を犯すも同様である。兒童の時代は最も語學を學ぶに適して居る。故に教師も父兄もよく此の時機を利用して、一國若くは數國の語を學ばせるやうに骨折つて欲しい。尤も數箇國の語を學ぶには、數年間英語、更に數年間獨逸語、其の後また佛語と云ふ風に、順次に練習の功を積まねばならぬ。而して語學を習ふと共に、それを利用して、他の學科をも學ばせるが宜い。一度習つた外國語が、後々までも頭に残つて、十分應用が出来るだけになるには、どうしても數年間熱心に勉強しなければならぬ。また英獨佛と三箇國を一緒に習はうとするのは、不可なること云ふまでもない。かくすれば彼れ是れ混同して、結局何もう頭に残らぬことゝなるであらう。

若し繪畫或は手工を特別に習ひたいと云ふ希望のものがあらば、

主なる學科の傍、それを學ばしても差支ない。唱歌の合唱の如きも、毎日練習して差支ない。勿論之は音樂的技術を養成する爲めではなく、感情の發達を遺憾なからしめん爲めの一方に過ぎぬのである。

また歴史、地理、博物、數學などは、一時に授けては宜くない。今日のやうに同時に種々雑多の學科を少しづつ授けるのは、どの生徒にも甚だ迷惑なことであるが、就中俊秀のものには、水火の責めよりも苦難である。彼等の深き研究心も、直覺も、活動力も、快感も、之が爲めに酷く制肘され、散亂され、ほんの上^{うへ}に走りやうになるのである。

予の夢に入つた學校では、色々一時に授けるなどの愚はしない。春夏秋冬常に異なる所の自然界の状態と、人の心情がそれによつて受ける影響とを斟酌した上で、學科の配當をする。例へば冬期は數

學を教へる、寒冷にして晴朗なる冬の空氣には、數學が最も適當して居るからである。春と秋とは自然に接するに最好の時期であるから、大抵の日は終日野外にあつて、自然界の研究をする。それも地理は地理、動植物は動植物と、箇々別々にせず、何事に限らず自然界に屬するものは、一つに統括して研究する。既に自然其のものが一個の統一ある現象である以上、故意に之を分割する必要はないのである。單に必要なのみならず、不自然になる。かくして生徒は、各々自然の事物を實見した後、更に良教科書に就て、歸納的説明を得、全體の法則を會得するに至るのである。また雨天などの日には、自ら歸納的思想を用ひて、野外に得たる材料を統一し、原則の發見を試みるのである。徒らに多數の植物を採集し、幾百の骨節の名を暗んずるのみが動物學や植物學ではない。吾々を圍繞する自然は如何なる生活状態を呈し、如何なる發達を爲すかの原則を研

究し、自ら自然の現象を観察して、之を系統に排列し、一の法則に貫くことが、即ち科學の本領で、かくてこそ感情の上にも、思考や想像の上にも、また吾々の性格の上にも、得る所があるのである。自然科学の研究に於ては、不秩序に同じ事を幾度も繰返すことを避けて、段階的に進んで行かねばならぬ。之と同じく地理や歴史も或る時期に於て、専心一意之に従事せしめ、あとは一切構はぬやうにしたならば宜しからう。長い間絶えず同じ事を反覆繰返して、而も肝腎の精神はいつの間にか藻抜けの空となり、徒らに章句の末に走るの弊は、今日往々見る所。蓋し之は例の試験制度の然らしむる所であるから、制度と、もに早く驅逐してしまはねばならぬ。試験の爲めに記憶した細い事柄は、試験が済めばやがて忘却される。今日既に教育の出来上つた人士に就て見るも、學校時代に苦んで記憶した細い事柄は、毫も頭に残つて居ず、たゞ全體の觀念だけが留ま

つて居て、それが實際思想の上にも、感情の上にも、將たまた性格の上にも役に立つて行くので、前章に述べた所謂教育の美果なるものは即ち之である。此の経験は恐らく何人も味はつたことであらう。それにも拘らず、今日依然として同一の経験を繰返しつゝ、之が改良の手段を講せざるは何故であらうか。

予が夢の學校に於ては、歴史に興味を感ずるものは、冬期の間之に關する書籍を読み、數學、動植物などを好むものは、また其の方面に向つて特別の研究をさせるやうにして居る。さて春が來れば、此の『小歴史學者』と『小博物學者』と、相携へて旅行を爲し、博物學者が採集し、解剖し、顯微鏡に照す間、歴史學者は傍らにあつて助手の役目を爲し、兼て自己の見聞を廣める。かくて例へば一團の修學旅行隊が、自然の生活と人類の生活との關係に就て研究問題を與へられたとすれば、冬は歴史に、春秋は動植物に就いて、其の

解決を勵む好い機會を見出すと出来るのである。之は僅に一例に過ぎぬが、他にもなほ種々有益なる學科の排列配合の方法もあらうと思ふ。要するに同時に課するは二三科目を限りとし、年齢相當な程度に於て十分なる研究をさせたならば、其の上は同じ事柄を幾回も繰返さず、後に専門の學校に入るに及んで、再び之を始めれば宜からうと信するのである。

また今日の學校が、科目の統一と聯絡とを等閑に附し、生徒の趣味を減じ、能力の發達を阻害するのも、教育上の一大弊害である。故に未來の學校に於ては、先づ科目の聯絡を專一とする。例へば歴史の如きは、専ら生存競争に關係ある部分を授けて、一科目内の統一と他科目との聯絡とを圖るとにする。蓋し生存競争の状態を網羅せるものは即ち人類發達の歴史であつて、社會學、經濟學、宗教、文學、美術等諸種の學藝の發達も其のうちに含まれて居るのである。

また自然科學及び數學の教授に際しては、其の道の大學者、發明者の傳記等を授けるやうにする。地理は大に範圍を擴げて、殆ど總ての學科と聯絡せしむるやうにする。地理は教授の方法如何によりて、實にあらゆる學科の中心と爲すことが出来るのである。

第六節

今日學校の效果は那邊に存するか
○學校卒業後新聞一枚役に立つやうに讀めぬ者
 ○夢の學校の眞價
 ○上下兩階級の接觸
 ○合同學校卒業後入學すべき専門學校
 ○人間は成功を急ぐべからず
 ○調和統一的教育

予は常に疑ふ、今日の學校の效果は、果して那邊に存するのであらうかと。腦力の消耗、神經の衰弱、創作心の畏縮、直覺力の弛緩、觀察力の遲鈍、理想の降下、これ等は豈夫に學校の效果に數へることとは出来まい。學校を卒業して一兩年も経つた後に、性質の良い人は初めて研究心を起すやうな次第で、通常の人は折角學校を出ても、新聞一枚役に立つやうに讀み得ぬ始末。之れでは學校の効果が甚だ

疑はれるのである。外國語には毎週多くの時間を費すにも拘らず、卒業後外國の書物が稍々完全に讀めるものは、殆ど例外に屬する程である。諸種の現象を自分で觀察し、説明し、また之を自分の觀念に聯合することなどは、學校の形式的、模型的學問の爲めに、却つて益々拙劣になつて來る。醫科に久しく教授の職を奉じて居た或る學者が、奉職中の經驗を語つて、生徒は學校で目も耳も手も利かなくされてしまふと、嘆いたことがある。また予は或る官吏から之と同様なことを聞いたことがある。其の人の曰く、『學校出の若手が社會の活問題を捉へて、學校の試験問題を解くやうに、青くなつたり赤くなつたりして居るのは、如何にも笑止千萬なことである』と。これ等の言によつて見るも、今日の學校の組織は、第一の目的たる人生實在の眞意義に反するばかりでなく、第二の目的たる實用の方面にも、一向適當しないことが明かである。

然し予は確信する、遅くも今日から二三百年経つたならば、かゝる迂愚な組織はなくなるであらうと。其の時は予の夢の學校が實現されて、生徒は先づ第一に生活其の物を觀察し、愛好し、自己の力を生活の最高要素として、之が發揮に努めることとなるであらう。此の學校は固よりあらゆる階級の子弟を、一堂の中に集める組織であるから、上流社會の子弟は、下流社會の子弟に接して、自己の短所を補ふことが出來、下流社會の子弟は、上流社會の子弟の感化によつて、其の趣味の狹隘なるを救ふことが出来る。加之上下懸隔なき教育法は、社會に於ける人間の地位の循環を活潑にする利益がある。即ち伯爵の若殿も、天性馬丁に適するならば、否應云はずに馬丁となり、水吞百姓の悴も、天性政治家に適するならば、一躍して國家樞要の機に參する身分となることが一層速に出来るやうになるのである。夢の學校に於てはかく上下兩階級が相接觸して、互に感

化を及ぼすのみならず、また男女兩性を合同して教育するにより、兩者の長所を交換することが出来る、即ち異性のものが互に長を採り、短を補ふに於て、遺憾なき便宜が得られるのである。

此の名實相適へる「合同學校」に於て、思索に長せるもの、藝術に巧なるもの、みな自己に適應なる教育を受けたる後、初めて専門の學校に入つて、文藝、美術、科學、工藝、各々其の長する所に向つて、研究を繼續し、以て他日從事すべき職業の基礎を作るのである。されば専門の學校に於ては、多種多様の様式原則を網羅して、多種多様の人才の輩出に應じなければならぬ。學校が此の要求に應ずることが出来れば、今日の如く形式に盲從する奴隸的精神や、形式を蛇蝎視する虛無黨的謀叛心は自ら消滅して、確實なる個人力が養成され、科學の研究にも、器械の發明にも、文學美術の製作にも、處世の術にも、總て無理のない個人力が活動し、雄大なる思想が湧

き、豪壯なる冒險心が起り、破天荒の新發明も出来るやうになるのである。かゝる教育を受けた人士は、疑もなく學校や家庭で蔭かれた種に花を咲かせることが出来、自己の熱血を注いだ研究の結果を樂むことが出来るやうになるのである。

學校は今日の如く、生徒をして徒らに「何か一廉の成功を」と齷齪させぬが宜しい。泰然自若たる態度を以て、人生の偉大なる所以は、事業の成否に存せずして、人物の如何に存するのであるとの確信をば、深く彼等の頭に刻み込まねばならぬ。「凡人は事業の成否によつて品評され、偉人は人格によつて尊まれる」とは、少し奇矯の言ではあるが、確に一面の眞理を含んで居ると思ふ。

今日の如き學校の組織では、生徒の注意力、聯想力、其の他諸能力の發達が拘束されるのである。最も好結果を擧げ得たと稱せられる場合でも、吾々から見れば、可惜有爲の少年を萬屋的に、袖珍百

科全書的に、造り上げたに過ぎぬのである。之では到底彼等が標榜する調和統一的教育の實を擧げるとは出來ない。一度此の點に心付いたならば、如何に學校最負の人と雖も、學校の價值勢力に對する誤解より醒めざるを得ぬであらう。抑も學校なるものは、人間の全生涯に亘る大修養を遂げる爲めに必要な準備を爲す所に過ぎぬもので、またそれ以上に出づべからざるものである。教育當事者が、此の見解を以て學校を率ひ、學校に對してこそ、初めて學校は、人生を裨益する重要機關となるのである。またかくてこそ初めて、學を好むものも、好まぬものも、書を受するものも、藝術を樂むものも、實用的才能に富むものも、理想的思索に長ずるものも、各々其の所を得て、自由に吾が好む所、長ずる所に進むことが出来るのである。而も事實は甚だ妙なもので、年若き人々は吾が思ふまゝ好むまゝに、何處へなりとも進むことの自由を與へられると、自然他の

人の好んで爲す所をば、自分もまた試みたいとの一種の欲望を起すものである。不思議ではあるが之は事實に相違ない。之が爲めに彼等の得る所の智識は、期せずして多方面に涉り、其の結果は、調和統一的教育の名の下に、萬屋的教育を爲すよりは、遙に良好なのである。

第七節

未來の學校に供給する教師の客觀的と主觀的教育者の教育的價值の賢明なる紳士淑女に就て處世の道を學ぶべしの一場の夢物語

未來の學校に供給する教師は、全く新しい師範學校で養成されねばならぬ。官許の教育學の代りに、個人的教育學が崛起しなければならぬ。教師には天性若くは修養の結果、生徒を愛すること吾が子の如く、生徒と遊ぶこと同年輩の友達の如く、而もよく兒童を觀察して、自家獨得の教育法を考へ出すやうな人でなければ、任命され

ぬことにしたい。任命に先だつてはまた檢定を要する、檢定は其の人の教授の實際を一年以上觀察した人の判定と、其の人の教育を受けた生徒の評判とを参考とするのである。勿論生徒の批判は、一概に重きを置くことは出来ぬけれども、然し生徒は、彼等の『最も尊しとする人』を判定するに當つては、一の驚くべき本能を有つて居るので、大抵誤らぬ鑑定をつけるのである。さらば生徒の見て以て、『最も尊しとする人』は、果して如何なるものであるか。之が答辯に代へて、予はこゝに詩聖ゲーテの言を掲げやう。ゲーテ曰く、『人間に上なきものは、人格たゞ是れのみ』と。

今日の教育家は、教授上に客觀性を尊ぶけれども、古來の偉大なる教育家は、多くは極めて主觀的人物であつた。教師は勿論眞理を愛する心がなくてはならぬ。自己の偏見に強ひて道理をつける爲めに、事實を枉げるやうなことがあつてはならぬ。然しながら既に之

れだけのことが、嚴重に守られたならば、其の上は寧ろ主觀の度が強いほど宜しい。主觀の度が強ければ強いほど、自家の經驗、人生觀、特質等を生徒に傳へるに當つて、語に力あり、生命あり、直に生徒の肺肺を衝くのである。されば若し彼れにして、自己の云ふ所を悉く生徒に採用させやう、服膺させやうなどゝの心さへなければ、彼れの主觀は生徒に與ふる感化を大ならしめ、其の進歩を早からしむる利益こそあれ、害は少しもないのである。

また予が夢の學校の教師は、毎日の受持時間が少く、休憩時間と報酬とが多い。絶えず自己を進歩せしむるには之が第一に必要である。服職期限は最も長いものでも二十年を越えない。其のあとは老後の生活に差支なきやうに待遇する。

將來に於ては最早指示教育と云ふものは影を潜めて、自修教育に
なるべき筈であるが、若し少しでも指示教育の面影が残つて居ると

第五章 未來の學校

すれば、其の缺點を補ふ爲めに、ソクラテスの人物養成法の如き手段により、種々の問を設けて、生徒の注意を人生の眞面目な問題に惹き、以て彼等の道德的發達を促すも宜い。之は少年期より青年期に移る中間の時期に最も必要な教育法である。かゝる教育を受けた後、彼等は更に賢明なる紳士淑女に就て、處世の道——即ち自分の人格を立派に造り上げる法——を學ばねばならぬ。但し其の紳士淑女たるや、己れの青年時代をなほ保存して居つて、青年の苦痛、歡樂、空想、赤心、缺點、危険等、凡そこれ等のことをみなよく了解することが出来る人でなければならぬ。而も餘り奥深く立入らずに、極く軽い暗示ぐらゐを以て彼等を誘ひ、彼等をして自ら省み、自ら覺らしむるやうに指導することが出来る人でなければならぬ。

政府が飽くまでも武斷主義を以て教育界に臨み、幾多の犠牲をも

意とせぬ今日の悲惨なる状態が改まらぬ以上は、予が夢みたる學校の如きは、決して近き將來に實現することは出来まい。一朝此の状態が改まつて、漸次進歩に進歩を重ねるに至らば、何人も學校の爲め、如何に多くの費用をかけても、惜む所はないと曉るであらう。健全な智識と感情とは、人生に於ける最高價のものであると悟つたならば、それに對する出費を惜む人は、殆ど亡くなるのである。けれどもそれは何時のことか解らない。故に以上予が續述したことは、決して學校の改革案と呼ぶほどのものではない、改革案などを今持出したところで、無益な業であると云ふ位は、予の愚と雖も豫め承知して居る。前述の如く、右は全く一場の夢物語に過ぎぬのである。たゞ然しながら、夢とてもまた實在界に儼存する所の、一の争ふべがらざる事實であることは、今更めて云ふまでもないこと、信ずる。

第五章 未來の學校

第六章 英國の新式學校

第一節

英國に於ける學校改革の快舉○アボツホルム學校設立者レデー氏の言○新式學校の特色○學問と實際生活との聯絡○諸學科の取扱方○新式學校の二十四時間○諸方に於ける學校改革の氣運

此の論の筆を擱くに當り、宛も英國に學校改革の快舉ありし由の報道に接した。そはかの國現代の學校組織に憐焉たりし有志者等が、奮然起つて教育界に革命の旗を翻し、終に二三の新式學校を創立するに至つたとのことである。其のうち最も成功したのは、セシル、レデー博士が、アボツホルム、ロヂェスター、及びスタフフォード、シヤアの三箇所に建てた學校で、其の組織は餘程讀者諸君の參考になることゝ信するにより、こゝに聊か其の狀況を述べて、予が所論の缺を補はうと思ふのである。

レデー氏自身の言によれば、氏はラスキン、ヂスレリー、及びカイライルの説に服し、またハーバート、ライン學校に於ける諸學科の有機體的統一組織——即ち一個の有機體的各部が、微妙なる統一をなして、生命を作ると同じ趣きに、諸學科に統一を置くの組織——が大に氏の心を動かして、こゝに理想的學校新設の決心を起させたと云ふのである。然しながら更に氏の學校の特色として見るべきは、校長たる氏の人格と、英國の國民性とが、汪然として校の内外に溢れて居ることである。此の學校は十一歳乃至十八歳の生徒を收容するのであるが、どの生徒も十五歳までは、殆んど一樣な科目を授けられ、十五歳以上より種々専門の學術技藝に應ずる分科に入ることなるのである。此の學校の努むる所は、諸學科の間に自然的連絡を保つは勿論、學問と活社會の事實との間にも、相當な連絡をつけやうと試みる點にある。されば學校に於て、艇庫、庭球場等の設計、

第六章 英國の新式學校

施設、修繕などの起る場合には、之を機として生徒に數學や手工を實地に應用させる。其の他の事みな此の風である。歴史の時間に教授された行政上の觀念は、直ぐと小結社の活動に應用され、生徒は各々其の結社の一員として、何れも全體の利益を増進すべき仕事を分擔する。また屢々擬國會の如きものが開催され、時局問題を即座の議題に上せて、大に論議を戦はする。之は學校が時事に冷淡なるの弊を救ふに於て、最も有効なるべきは明かである。體育は單に體操や遊戯を以て足れりとせず、眞面目な勞働をも體育の一要目とし、工場或は田畑の仕事を課する。語學は國語を基礎として、佛蘭語、獨逸語に及び、最後に希臘、羅典の古典をも學ばせる。歴史と地理とは、常に密接なる關聯を有せしめ、また地理と博物とは、成るべく野外に於て教授し、之を分離することがない。かくして此の三者は互に主となり副となり、結局人生と自然とを、層一層深く研究す

第六章 英國の新式學校

る目的に向つて進むのである。宗教道德教授は、教育の大部分を占めて居るが、然し宗教其の物を教へるのではなく、基督を初め幾多偉人傑士の傳記を授けて、生徒の心を啓發するのである。禮拜堂はこれ等模範的人物の肖像を以て飾られ、祈禱の代りに偉人の運命を物語り、時には彼等が取つたる出處進退を論評することもある。音樂及び文學の教育は、重に夜に入つて行はれ、また屢々討論會が催されて、辯論の修養を資けて居る。

成績の優れたるものに、褒狀を授け、賞品を與へて、競争心を挑發する如きは、人工的な不自然な方法として却けられて居る。生徒の學力の程度を時々父兄に通告はするが、由來學力は商品に定價をつける如く、點數で測量することの出來ぬものであるから、たゞ大體を知らずに過ぎない。夏になれば機會を見て、父兄を學校に招待し、子弟の教育に就て意見を聞くやうにする。

終りにアボツホルム學校の二十四時を述べて見やうならば、午後九時より午前六時までが睡眠時間、起床後直に第一朝食、體操、第一授業四十五分間授業時間は凡て四十五分、祈禱、第二朝食、寢具整頓、第二授業、喫茶、第三授業、入浴、晝食、音樂、それより凡そ四時間は繪畫、手工、園藝、遊戲等に充て、次で喫茶、第四授業、音樂合奏、朗讀、作詩、生徒の集會、祈禱、就寢。

此の時間割は、體育、實學、美育を主とし、智育を副とした點に於ては、頗るよく出來て居る。たゞ遺憾とすべきは、生徒をして悉く協同的、團體的束縛を脱して、思ひの儘に讀書し、冥想せしめ得べき、眞個自由なる隨意時間の無いことである。之は一の大なる缺點ではあるまいか。サーリー教授は其の著『天才の教育』に於て論ずらく、『天才は生徒としては殆んど悉く不評判なるが常で、自ら好んで不規則な教育を受け、突飛な着想、奇異な慾望、其の他總て非團體

的傾向を示すものである。惜いかな個人性の培養に就ては、アボツホルム學校もなほ舊來の學校組織の弊を免れぬ」と。

教員を養成するには、教育學に先んじて、幾多偉人の傳記を研究させねばならぬ。何となれば若し教育なるものが、一定の組織に拘泥したならば、假令其の組織が何人の手によつて成立つとも、生命ある教育を施すことは出來ないからである。眞の教育を施すには、生徒一人毎に特別の組織を編まなければならぬ。さなくば教育は兎角形式に流れ易いのである。總て偉人の傳記は、よく此の間の消息を語つて居る。彼れ等は子供として不規則であればあるほど、繩墨的關係が少ければ少い程、其の特長を發揮するの便宜を得て居るのである。多勢の生徒のうち、果して何人が天才の實を具へて居るものであるかは、容易に解り兼ねるであらうが、彼等がみな一人々々、特別の趣味、性質、要求を有つて居るものとして、個人的教育を施

第六章 英國の新式學校
す、こと、が、全體の生徒の利益であることは、今更暇々の辯を費すまでもない。されば此の方針は天才の爲めには勿論、凡才の爲めにも出来るだけ廣く應用すべきものと信ずるのである。

第二節

キング、アルフレッド學舎の新教育主義○最急進主義のラスキン家庭學校○此の學校の起りたる原因○授業の時間制は天氣都合にて變更す○沈勇忍耐を男子の本領とす○諸學科の取扱方○此の學校の目的

嘗てアボッホルムに教鞭を執つた一人の教師が、ベデールスにアボッホルムと同主義の學校を建てたのを初めとして、リーツ博士もまたイルセンベルグに同様の企畫を起し、佛國に於てもアボッホルム式の學校が設けられるに至り、改革の氣運は漸く盛になつて來た。また英國に於ては、未だ嘗て例のない、一の理想に屬して居た、男女合併の教育が、ブレイクウエルの普通學校、及びキング、アルフレッド學舎によつて實現された。斯界の前途の爲め、洵に頼母しい次第

と云ふべきである。キング、アルフレッド學舎の企つる所は、先づ第一に品性の涵養を圖ることであつて、其の手段として、男女の共學、家庭と學校との協力、及び實物教育を努めて居る。物理、數學を手工と連絡する等のことは、アボッホルムと同主義であるが、最も重きを置くのは、彼と異つて、人道の端とも云ふべき冥想力を養ふことである。『冥想は同情の母、眞の文明の源』と宣言して居る。洵に悦ぶべき卓見である。また歴史と地理と文學とは、語學とも、學問の基礎を爲すものとして、之れに多くの時間を供給して居る。之は至當のことと思はれる。また宗教教育なるものを全然省いたのも、頗る面白い主義である。教育の初步に於ては、少しも教科書を用ひず、ロンドンの外廓または野外の散歩と、博物館の見物を主とする。此の間に得たる兒童の觀察と經驗とを修學の起點として、地理、數學、博物、進んでは歴史、文學等を授ける。遊戯と手工とは、單に娛樂と

見做さずして、之を課業のうちに加へ、土曜の終日のみを生徒の娯樂日とする。試験もなければ、賞状もない。二年間此の組織を實行した経験によれば、此の教育は、兒童の義務責任を重んずる心と仕事を悦ぶ心とを盛にするのみならず、彼等の健康を高め、觀察、思索、創作の力を増すことに於て、他に比類がないことである。

英國の改良學校の中で、最も急進的なのは、ロウエリソンの開いた『ラスキン家庭學校』と稱する普通學校である。特にラスキンの名を冠したのは、蓋し創立者がラスキンの教育學より影響を受けたことが多からであらう。さりながら彼れロウエリソンは、決してラスキン一家の祖述者たるに止まるものではない、全然新智識の人である。信仰は合理的宗教で、理想的社會主義を唱導し、且つ最も自然美を憧憬して居る。而して彼れの教育主義は、人道を以て人道を教へんとするにあるのである。氏は嘗て或る公立學校に職を奉じて

居たが、在職中其の恐るべき悪組織を忌避するの念が、益々強くなると、もに、憤然改革の決心を固めたのである。其の公立學校に於ては、兒童を捉へて、毎日長時間粗末極まる椅子に坐らせ、濫に之に記誦を強ひ、多くは營養不良睡眠不足な生徒を、一級甚だしきは百人近くも一緒にして、一定の日課を修めさせるのである。生徒は其の本能の作用によつて、自然に學校を缺席し、また懶け勝になる。而して學校は之に對して體罰すらも辭せぬと云ふ有様であつた。

ロウエリソンはこゝに於て考へた、教育は正に此の反對に出ねばならぬと。即ち斷然職を辭して、教育に關する自己の理想を公表した。此の時氏の主義を賛して、子弟の教育を托したものが都合二十五名、其のうち數名は女子であつた。二十五とは數に於て少いが、氏は此の少數に却つて満足した。何となれば氏の理想は、全然家庭的の組織であつて、同情の念を涵養するのが一の大目的、それには

少數が却つて便宜である。此の學校が出来たのは、千九百年の一月であつたが、過日予は參觀の機會を得て、兒童がみな快調、正直、從順の美風を有し、且つ一種氣高い所があるのを見て、直に創立者の理想が實現されてあることを認めた。兒童は彼等の共同家庭に於ける諸般の用務、學業、遊戯等を愉快氣に打ち連れて勵んで居り、而して其の間禮儀作法の紊れるやうな舉動は、毫も見受けなかつた。生徒の中に過失ある時は、種々の手段によつて、彼れを反省せしむることとし、成るべく直接の叱責を避けるやうにする。體罰などを用ひぬことは云ふまでもない。而して學校の最も力を注ぐ所は、身體の健康と、頭腦の明晰とを進めるにあるを以て、授業は出來得る限り野外に於てし、雨天などにて止むなく室内にある時も、天晴れ氣爽かなるに至れば、假令ひ授業中なりとも、直様之を野外へ移すのである。また入浴と、日光と、空氣と、新鮮なる營養物とは、健

全なる人を造るに缺くべからざるものなるを以て、授業の時間割の如きは、天氣の都合、潮の干満などによつて、臨機變更しても差支ないと見て居る。遊戯としてはクリケットその他種々あるが、單純なる遊戯よりは、水泳、消艇、遠足または手工の如き、自然的の運動を重んじ、園藝牧畜の類も盛に奨励されて居る。云ふまでもなく體育の目的は、天與の體質を健全に保存する點にあるので、種々なる遊戯の如きは、もと其の手段たるに過ぎない。然るに只管遊戯にのみ熱中するときは、何時しか目的と手段とを轉倒して、終には正課を放擲してまでも、之れに従事するやうになる。ロウエリソン其の他の改良學校が、みな一樣に此の點に着目して、遊戯を副としたのは、流石に事の本末を明にした、頗る當を得た處置と云ふべきである。

此の學校の男生は、徒に鼻息荒く強がることを避け、男子の本領

は却つて沈勇忍耐であると教へられ、温厚篤實は人の人たる所以である。と教へられる。されば僅に十歳乃至十四歳位の少年にして、友愛の情に富み、協力の念熾なることは、他に殆んど類がない。彼等は祈禱會に出でよ、教會に行けよと、責められることは更でない。日曜日には白砂青松の海濱などに伴はれて、青々と澄み渡つた大空の下に、基督や釋迦の話、さては古代の神話、英雄譚などを聴くのである。かくて宗教心と道徳心と二つながら遺憾なく喚起され、自己と自然とを尊ぶの心は、微妙の一完體をなして發動し、こゝに研學の動機を興ふることとなる。之に加ふるに博學篤行の教師が、絶えず温い感化を興ふるにより、兒童はいつとなく宇宙の大を解し、天然を愛するの心が起り、教育有終の美を全うすることが出来ることとなる。熱心に動植物を採集し、親しく岩の形、雲の姿などを観察するうちに、森羅萬象が一定の方向に進化する有様や、適者生存の

活劇が、整然として彼等の脳裡に寫つて来る。圖書は實物寫生を主として、秩序、裝飾、觀察、統一等の智識を其の副産物と見做し、教師は此の兩面の教育に心を用ふるのである。

佛蘭語、獨逸語は、ともに新式の教授法によつて教授し、更に海峽を越えて、其の語の母國に修學旅行を試み、完璧な智識を求めんとして居る。英國學生の此の大陸旅行は、語學の智識を確實にすると同時に、偏狭なる島國的根性を打破して、大に大陸的氣風の長所を吸入する利益がある。代數幾何は暗算と考察との二つに分ち、何れも日用の事に連絡をつけて、實用を主とする。此の學校では一切試験なるものを行はぬ。否、試験てふものゝ觀念すらも、學校に入り込むのを許さない。此の學校の目的は、社會國家に、眞紅の血、透明の眼、廣き胸格、自信、温厚、美術眼、啓蒙心、隨時隨所の歡樂にも悲哀にも共鳴して鼓動する心臓、これ等總てを具へた人物、

第六章 英國の新式學校
即ち生理的にも心理的にも健康機敏な人物を供給することである。
此の學校の目的こそ、その儘あらゆる他の學校の唯一の目的となつて來なければならぬのである。

二十世紀は兒童の世界

「二十世紀は兒童の世界」批評一斑

本書世に出てより好評噴々として其の斬新なる論旨は至る處に反響を招き、こゝに第三版を重ねることとなり。今左に新聞及雑誌の批評二三を掲げて讀者の參考に供せんとす。

大阪朝日新聞

本書は北歐「スカンゲネビヤ」半島の一角瑞典の「スモーランド」に生れたる女教育家「エレン、ケイ」女史の著「兒童の世紀」なる書を解説せしものにして、「子の親を選ぶ権利」なる奇抜の題目を劈頭先づ選びて續々章を重ね論じたる教育的識見、隨に斯道の學者の一顧を要すべき書なり。譯者嘗て伯林留學中本書を得て之を邦語に譯し、我が教育界に貢獻する所あらんとせしもの、今其公版を見る眞に有益の著と云ふべし。

萬朝報

讀貴新聞

原著は瑞典の小學教師エレン、ケイ女史の編述に係る「兒童の世紀」と名づくる近來の快文字にして、既に各國に歡迎せられたるもの、劈頭第一に親に對する兒童の權利を主張し、從來の男女關係の缺點を指摘して男女共同生活の新形式に及び、普通學校を全廢して家庭を以て兒童の教育所となすべきを説き、從來の教育説及實地教育者が兒童の個性を重んぜずして同一の類型に出でたる傀儡たらしめ、精神的殺人罪を犯せることを道破し、形式的、注入的、命令的の教育の弊害を絶叫して、最後に自己の理想とする遊戯場的學校の組織を説き、極めて自由なる自修的、開發的の教授を唱道したるものにして、眞に我邦現時の教育法の缺點を摘抉するものに非るかと思はる。解説は詳細といふ可らざるも簡明なれば、苟くも身を教育に委ねる者は、必ず一讀せざる可らざるなり。

原著者エレン、ケイ女史は、瑞典の一小學教師なり、極力學校の均等主義を排撃して、其の精神的殺人罪を絶叫し、家庭の萬能を唱道し、普通學校の廢止を論じて、個性の長養、形式的教育の打破を説く所、痛快淋漓、若し夫れ開卷第一「子の親を選ぶ権利」なる標題下に、現今男女關係の不備を痛罵して、兩性的共同生活の新形式を提唱せる如き、寧ろ有舞男子をして後へに撻若たらしむるものあり。我が文部省訓令の忌避に觸れずんば幸ひ也。

日本新聞

瑞典の小學教師「エレン、ケイ」女史の著「兒童の世紀」の會心の個所を取つて抄録したるものなりと云へり。原書は獨逸文に翻譯されたるもの、み既に二十餘版を重ねたる程の流行の著書なりとの事なるが、單に此書のみにて見れば、夫れ程激烈と思ふ處はなきも女性としては其の論旨分外に鋭利にして精選、個性の長養を呼び形式の打破を論じたる邊は最も其の精神を見らるべし。「子の親を選ぶ権利」「教育の要訣」は名題ほどに格別之と云ふ卓説ならざるも、鑿々として妥當の

見、父母師長の耳を傾くべきもの少なきに非ず、唯だ其の説く所の煩雜に過ぐる傾きあるは、女性教育家の婆心として止むを得ざるか。

日本の家庭

これこそ有名な「エレン、ケイ」女史の「兒童の世紀」です。「元より一種の教育書には相違なきも、而も世間普通の教育書とは全然その撰を異にし、血あり涙あり靈ある筆を以て、今日の家庭、學校、社會の三方面に聳る幾多の弊害を描寫し、これが政治の策を講じたものである」と。開卷第一に「子の親を選ぶ権利」といふ奇抜な題目をかゝりて、今日の結婚制度の弊害と兒童の病弊とを指摘し「教育の要訣」と「家庭の衰微」との題下に於て、家庭教育の必要とその新方法とを教へ、進んで「學校の精神的殺人罪」を説き、在來の均等主義の教育を痛罵して、盛んに個性の長養を鼓吹するあたり、實に案をたいて快哉を叫びしめします。また、夢に托して「未來の學校」を説き、「英國の新式學校」を紹介して居るなど、何れも現代の時弊を根柢から破却して、新しい教育の主義と制度とを取らう

とする意氣が、紙面に溢れて居るのであります。痛快なる論旨に、何れも痛乎たる根據があるので、讀むものをして快哉を絶叫せしめると同時に、一々その理義の正當なるに首肯せしめます。言ふまでもなく斬新なる意見を、輕妙流暢なる筆で譯述したのでありますから、眞に一讀して卷の終ることの早きを歎かされるのであります。思ふに、一たびこの書を経いたものは、必ずや決然として教育の革新を促し、家庭の改善に努めるであらうと信じます。教育家は勿論、苟くも血あり涙ある人士には、社會の進歩と教育の効果とを期するため、この書を三讀せられんことを、衷心より薦めてやまないであります。

愛國婦人

本書はスエーデンのエレン、ケイ女史の原著より新日本の教育に益すべき部分を抜萃譯せしものにて如之多年兒童教育に興味を持たれたる氏の意見を加味して親切に記述しあれば世の母たるものは必ず一讀するの價値あり併し全編を六章に分ち頗る奇抜の題目を掲ぐ假令「子の親を選ぶ権利」或は「學校の精神的殺人

罪」等の如し。

教育學術界

原著「兒童の世紀」については、嘗て小西文學士が、本誌上にその大要を紹介せられたることあり。讀者の記憶に、なほ新たなるべしと察す。この書、今や大村氏の輕妙平易なる筆によりて譯述せられ、わが教育界に供せられたり。解説者は曰く、
「エレン、ケイ女史の主義とする所は、健全なる向上主義である。而してその説を起すや、子の親を選ぶ権利なる奇抜の題名を掲げ來つて、生前に於ける子の權利を主張し、筆を極めて今日の男女關係の不備缺點を痛論し、大膽にも兩性的共同生活の新形式を提唱した。……進んで教育の原義に入り、終に普通學校の廢止、家庭の萬能を主張し、更に一步を進めて、今日の家庭の弊廢より青年男女の原因に論及した。その極力學校の均等主義を排撃し、學校の精神的殺人罪を絶叫するあたり、痛快淋漓、觸るもの皆燒くの概がある。女史の期するところは個性の長養、形式的教育の打破にある。故に否定的、命令

的、高手の禁壓主義を斥けて、悪なほ善に化すべく、一時の暗黒はやがてこれを光明たらしむべしと主張するを憚らなかつた。その説く所は悉く積極的である、開放的である、革新的である。その最後に夢に托して、理想的學校の組織を説きたる、今日俄かにこれが實現を見んことの不可能であるべきは勿論であるが、教育當事者のために、有力なる参考資料たらんことは疑がない。……原書は幾百ページの大冊子、予は原書に就いて最も必要と思はる、部分を抜き、これに對して、説を試みることにし、終にこの小冊子を成すに至つたのである。また原文の議論の激烈に過ぐるもの、或は吾が國情に適はぬもの、これ等に對しては適宜に取捨折衷を施した。」と述べて居ります。實に現代の形式的教育の弊に際らざるもの、家庭教育の衰微を慨けるもの、青年の煩悶墮落に思ひを寄するものに取りては、實に一味の清涼劑にして、有効なる改善の方法を指示するものなり。而も説くところ、一々學理と經驗との上に根柢をおくが故に、體過一地してその動かすべからざる眞理に首肯せしむ。教育家は勿論、政治家、經世家の熟讀に値すべき好書なり。

故大村仁太郎著述目錄

- 大村教育著述全集 定價金六圓
- 教育 我子の美德 郵税金廿八錢
- 寓話 我子の惡徳 定價金七十八錢
- 太郎は如何教育すべ 定價金八十錢
- 教育 子供と家庭 郵税金八十錢
- 家庭教師としての母 定價金七十錢
- 廿世紀は兒童の世界 郵税金八十錢
- 兒童精神の活 定價金七十錢
- 乙女の生涯 定價金六十錢
- 兒童矯弊論 定價金七十錢

明治三十九年十月十五日印
 明治三十九年十月十八日發行
 明治三十九年十二月二日再版發行
 大正二年七月五日訂正三版印刷
 大正二年七月八日訂正三版發行



解説者 故大村仁太郎
 發行者 株式會社同文館
 代表者 森山章之丞
 印刷者 綾部喜久二

二十世紀は兒童の世界
 正價金七拾五錢

發兌 大賣捌所

東京市神田區表神保町二番地
 電話本局四三三七・三三六七番
 振替貯金口座東京一三五七番

株式會社 同文館
 東京市神田區表神保町二番地
 東京市神田區雄子町卅四番地

東京早稻田 東京神田 大阪東區 朝鮮京城
 同文館 館 東 堂 證 大 證 日 韓 書 房

東京市神田區雄子町卅四番地 同文館 印刷所

工44-60

終